

# 世界遺産「熊野古道」を手作業で修復

日本道路は、CSR（企業の社会的責任）経営を推進することで社会から信頼され存続を望まれる企業となるとともに、持続可能な社会づくりに貢献することを経営理念に掲げている。その活動の一環として11月30日と12月1日の両日、和歌山県田辺市で「第1回日本道路の世界遺産保全活動『道普請』in熊野古道」を実施した。久松博三社長をはじめ東京本社から15人、関西支店から11人の計26人の社員が参加し、熊野古道の山道を人力で補修した。

同活動は和歌山県の世界遺産保全活動「道普請ウォーク」のプログラムに基づいたもの。熊野古道のある紀伊山地は年間を通して雨量が多く、加えて台風などの災害にもたびたび見舞われることから道の



傷みが激しい。そのため、県は参詣道の維持・修復活動のために企業や団体にボランティア協力を呼び掛けている。

なぜ日本道路がCSR活動として熊野古道道普請活動を実施するかについて、今回の企画を主導した経営企画部の河村憲彦課長は、道普請活動はSDGs（持続可能な開発目標）に適した取り組みであることを説明する。「SDGsを企業活動に定着させるには本業への取り組みが不可欠。SDGsは17項目の目標と具体的な取り組みである169項目のターゲットで構成されている。目標の1つ、『住み続けられる街づくりを』は建設業が取り組みやすい項目でもある。同目標には10のターゲットが設けられており、今回の熊野古道道普請活動はその中の『世界文化遺産・自然遺産を保護・保全する』と合致する



レーキを手自ら作業に当たる久松社長



道普請の翌日は熊野古道をトレッキング。普請個所のできばえを確認した

ものだ」と意義を語る。

田辺市本宮行政局で開いた結団式で久松社長は、「道普請活動を通して熊野古道を修復し、その価値を守り次の世代へと引き継いでいくことは、いまの

時代を生きるわれわれの責務であり、また道路会社としてこの意義ある活動に携われることは大きな喜びである」とあいさつした。

続いて、和歌山県世界遺産センターの辻林浩センター長から世界遺産入門レクチャーを受けた後、施工箇所付近までバスで移動。現場から約500m離れた位置に用意された約2トンの土を土嚢（どのう）に詰め、運搬一敷き均し一転圧までを全て人力で行った。

久松社長は自らレーキを手作業に当たり、終了後には「入社当時は現場でレーキを引いたりしていたので血が騒いだ。会社としてさまざまな社会貢献活動に取り組んでいるが、この道普請は『道からはじまる街づくり』という当社の原点から考えると本当に良い取り組みだ。今後も毎年実施していきたい」と感想を述べた。

## 道普請はSDGsに適した取り組み